

# 万葉集の「とに通ふの」

石 神 照 雄

本居宣長は、『詞の玉緒』第七之卷「古風の部」において、助詞「の」をとりあげ、「とに通ふの」という一項を立てている。<sup>(注1)</sup> 万葉集の歌二首を掲げ次のように説く。

(一) 天地の共に(阿米都知能等母余) 久しく言ひ継げと此の奇魂敷かしけらしも (巻五・八一四)

(二) ほととぎす来鳴きとよもす卯の花の共にや来しと(宇乃花能共也来之登) 問はましものを (巻八・一四七二)  
これらののは。とに通ひて聞ゆ。貫之集にもへをちかたの花も見るべく白波のともによ我も立わたらまし。又へ我宿を春のともにしわかるれば花はしたひてうつるひにけり。古今八にもへ秋霧のともに出出て云々。

宣長の主張は、「通ひて聞ゆ」というのであるから、「体言のとも」に「と」いう形式のものを、「体言とともに」という形式のものへと読み換えることを意味する。そのことは単純化して言えば、「体言と形式名詞」ともとの間に助詞「の」を介して構成される複合名詞の連語関係を取るのではなく、「副詞」ともに「と」を指定することである。

万葉集では「のとも」の形式をもつ歌は右の二首に加えて次の一首がある。

(三) 卯の花のともにし(宇能花能登聞余之) 鳴けばほととぎす いやめづらしも名告り鳴くなへ (巻十八・四〇九一)

いま、『日本古典文学大系』『日本古典文学全集』『万葉集注釈』で当該のものへの言及を注と訳等から拾えば次のページ(表一)のようになる。(尚、傍線は引用者)

また『時代別国語大辞典 上代篇』では  
ともに「共」(副)いっしょ。ともども。

と記し、用例を掲げた次に「考」として

トモニという形よりノトモニという形の方が語源としての友・伴の意に近く、それだけ古い形式であったのではなからうか。トをうけるのも一種の連体関係を構成しているわけであり、これら体言性を残したトモニに対して格助詞の支配を全く脱したトモニに至って副詞として確立したとみられる。

と記す。

これらはいずれのものも、形式名詞「とも」の複合構造を示し語源

(表一)

古典文学大系	古典文学全集	萬葉集注釈
<p>(一) 814</p> <p>天地の共に——天地とともに。トモは体言。従ってアメツチノトモと表現され、天地の同類といった意味になり、天地の同類としての意から、天地とともにの意となる。</p> <p>天地とともに永久に……</p>	<p>天地のともに……ノトモニは、いと いっしょに、の意。</p> <p>天地と共に久しく……</p>	<p>天地の共に久しく——「天地与共」(二・一七六、四・五七八)の如く「と共に」といふのが通例であり、ここに「の共に」とあるので少し異様に感ぜられる。「天地与 弥遠長尔」(三・四七八)とも「天地之 弥遠長久」(二・一九六)ともあるやうに、「の」であれば「の如く」の意となるやうであるが、「浪之共」(二・一三二)などの例を見ると「と共に」とあるのと殆ど同じやうに用ゐられたので、「の」の方が古風な風な用ゐ方と見るべきではなからうか。</p> <p>天地と共に久しくいつまでも……</p>
<p>(二) 1472</p> <p>の共に——と共に同じ。</p> <p>……卯の花と一緒にやうて来たのか……</p>	<p>卯の花の共に——……ノ共ニは、いと共に、の意。卯の花とほととぎすとは同じころの景物であるのでいふ。</p> <p>卯の花と共に来たのか……</p>	<p>「卯の花の共に」は「天地の共に」(五・八一四)と同じく、卯の花と共に、といふに等しい。</p> <p>卯の花と一緒に前はやうて来たのか</p>
<p>(三) 4091</p> <p>卯の花のともにし——卯の花と共に。「風ノむた」「君ガむた」など、共・一緒という言葉は名詞として、助詞ノ・ガを承けるのが当時の語法。</p> <p>卯の花が咲くと一緒に鳴くので……</p>	<p>卯の花の共に——ノ共ニは、いと共にの意。のの伴(つれ)として、というのが原義。時期的にいつて、ほととぎすと卯の花とが仲間という気持でいつた。</p> <p>卯の花が咲くと同時に鳴くので……</p>	<p>「卯の花の共に」は卯の花と共に、の意。「風ノむた」「君ガむた」など、共・一緒という言葉は名詞として、助詞ノ・ガを承けるのが当時の語法」と古典大系本に注意されてゐる。</p> <p>卯の花の咲くのと一緒に鳴くので……</p>

解釈を加えた説明が試みられている。しかしながら、突き詰めれば宣長の「に通ふの」ということを述べているにとどまる。つまり

- ・意味としては、「体圖のとも」は「体圖とともに」である。
- ・「体圖のとも」という連体の関係が副詞「ともに」に先行する。

として集約される。

しかしながら、宣長が述べている「の」と「の」が、「と」

に通ふ」ものとして歌の解釈が妥当なものとなるからといって、二つの形式の異なりを無視することはできない。「の」と「は」は各々構文の内部構造の異なりを反映したものと考えられる。等しく解釈できるといふことから、構文の内部構造の同一性までも主張したとしても、そこには何ら論理的整合性は存在しない。

はたして「の」と「は」の形式は「と」と「に」の形式と一致する構

文の内部構造を有するものであろうか。また「の」の形式は、「体言のとも」という複合名詞としてのありかたに限られるものなのであろうか。「とも」という形式が存在することで副詞としての構文機能は果たされているのである。にもかかわらず、「の」の形式にも同一の機能を担わせて在るということとは、文法という意味の論理法則からすれば甚だ矛盾するものと考えられる。一体「の」の形式は如何なる内部構造のものとしてあるのか。

本稿は、「とも」を有する万葉集の歌の構文の形式と意味についての分析を試みることにより、「とに通ふの」の問題解決を図ろうとするものである。

二

万葉集中「とも」をもつ歌は先のものに加えて次に掲げる十五首である。

- (四) 天地と共に終へむと(天地与共將終登) 思ひつつ仕へ奉りし情たがひぬ (卷二・一七六)
- (田) ……天地日月とともに(天地日月与共) 満りゆかむ…… (卷二・二二〇)
- (丙) ……新世に共に在らむと(新世余共將有跡) …… (卷三・四八一)
- (出) 天地と共に久しく(天地与共久) 住まはむと思ひてありし家の庭はも (卷四・五七八)
- (ハ) ……立てれども居れども共に戯れ(登母余戯礼) …… (卷五・九〇四)
- (カ) 潮干れば共に瀉に出で(共瀉尔出) 鳴く鶴の声遠さかる磯廻すらしも (卷七・一一六四)

- (イ) 朝な朝な草の上白く置く露の消なば共に(消者共跡) いひし君はも (卷十二・三〇四)
  - (ロ) ……もしもしきの大宮人は天地と日月と共に萬代に(天地与日月共万代余母我) (卷十三・三三三四)
  - (ハ) 天地と共に(天地等登毛余母我毛等) 思ひつつありけむものを…… (卷十五・三六九一)
  - (ニ) 事しあらば小泊瀬の石城にも隠らば共に(隠者共余) な思ひわが背 (卷十六・三八〇六)
  - (ホ) 春雨に萌えし柳か梅の花共に後れぬ常の物かも (卷十七・三九〇三)
  - (ヘ) ……鳴波多小女携へて共に(共將有等) 思ひしに…… (卷十九・四二二六)
  - (ヘ) 君が行もし久にあらば梅柳誰とともにかわが續かむ (卷十九・四二三八)
  - (ロ) ……天地日月と共に(天地日月等登聞仁) 萬代に記し続がむそ…… (卷十九・四二五四)
  - (イ) 秋風のすゑ吹きなびく萩の花共に挿頭さず相ひか別れむ (卷二十・四五一一)
- 右の十八首を形の上から分けると
- (A) 体言のともに…… (一) (二) (三)
  - (B) 体言のともに…… (四) (五) (六) (七)
  - (C) ともに(単独) …… (八) (九) (十) (十一) (十二)
- という三種類のものとしてあることになる。

三

ところで、現代語では「とも」は二つ以上の事物を統括してと

りあげるときに用いる。言語主体が個々のものの中から何らかの共通もしくは連関の要素を認定し、それを基に一体化して表わす。「ともに」の文型としては以下のようなものが考えられる。

①型  $\boxed{A} \text{ハ} \boxed{B} \text{トトモニ} \boxed{Y}$ 。

(1) 美ヶ原は上高地とともに松本の代表的な観光地だ。  
(2) 太郎は次郎とともに背が高い。

というように様態を表わす文では  $\boxed{A}$  にとって対等の関係にあるものを  $\boxed{B}$  トで表示する。また

(3) 太郎は次郎とともにこの夏アユ釣りをした。  
(4) 太郎は次郎とともに山小屋を作った。

というように行為を表わす文では  $\boxed{A}$  に対し  $\boxed{B}$  が共同者であることを表わす。

②型  $\boxed{A} \text{ト} \boxed{B} \text{ハトモニ} \boxed{Y}$ 。

(5) 美ヶ原と上高地はともに松本の代表的な観光地だ。  
(6) 雪と氷はともに水からできている。

(7) 太郎と次郎はともにこの夏アユ釣りをした。

ここでは意味が二通りある。一つは、様態を表わす文、行為を表わす文ともに  $\boxed{A}$  と  $\boxed{B}$  にとって  $\boxed{Y}$  が共通するものであることを表す場合である。このときは

(5) 美ヶ原と上高地は等しく松本の代表的な観光地だ。  
(6) 雪と氷は等しく水からできている。

(7) 太郎と次郎は等しくこの夏アユ釣りをした。  
という意味を有するものとして考えることができる。

いま一つは、行為を表わす文において相互に共同者であることを

表わす、言い換えれば共同性を表わす場合がある。

(7) 太郎と次郎は一緒にこの夏アユ釣りをした。  
という意味としてである。

ところで、①型の「ともに」は  $\boxed{B}$  トを省略すると構文の意味を成さない。これは松下大三郎のいう「帰著副詞」、所謂形式副詞である。 $\boxed{B}$  トが補充されることで副詞として意義を完成し機能するものである。

一方、②型のものは単独で副詞として機能するものである。ここでの $\boxed{B}$  トは、 $\boxed{X} \text{ハ} \boxed{Y}$ 。という構文にあって、同格の  $\boxed{A} \text{ト} \boxed{B}$  によって構成される  $\boxed{X}$  の内部要素としてのものであり、「ともに」に直接関与しない。

①型②型で様態を表わす文の場合、(1)と(5)とを例にとれば、これらは同一事態を表わす等しい文と考えられる。ところが行為を表わす文の場合には異なる事態を表わす文と考えられることもある。例を(3)と(7)にとれば次のようになる。(7)を(7)の共同性として捉えるならば(3)と(7)は等しい。ところが(7)は(7)として、二人の行為の共通性を述べているものとも考えられる。即ち、太郎が七月に甲の川でアユ釣りをし、次郎が八月に乙の川でアユ釣りをしたということから、(7)では「この夏アユ釣りをした」という共通性が表わされていると考えられるのである。この場合、(3)と(7)との事態は異なる。

③型  $\boxed{X} \text{ハ} \boxed{A} \text{トトモニ} \boxed{B}$ 。

(8) 太郎は大胆であるとともに細心だ。  
(9) お茶はノドの渇きをいやすとともに気持を落ちつかせる。

様態を表わす文の場合、 $\boxed{X} \text{ハ} \boxed{Y}$ 。という構文の  $\boxed{Y}$  を構成する二面が同時に並立してあることを表わす。 $\boxed{B}$  にとって  $\boxed{A}$  は対

等（同格）の関係にあるものである。これは二つの事態の同時性を表わす④—a型に連なる。

また、行為を表わす文の場合、例えば

- (10) 太郎は昼間は大学で学ぶとともに夜はアルバイトの仕事をした。

は、大学で学ぶことと、アルバイトをすることという二つの事態が並行的に存立することを表わすものであり、次の④—b型へと連なる。

## ④型

P — トモニ — Q

これは句と句を並べるものである。他の事態との連関によって、当面の事態の時間的展開のありかたを表わそうとするものである。ここでの「ともに」は帰著副詞である。これは意味の上から二つのものとして考えられる。

## ④—a型

- (11) 日が昇るとともに太郎は起きる。  
(12) 日の出とともに太郎は起きる。

これらは当面の事態（Q）の発生面を他の事態（P）との共起として表わすものである。ここでは事態存立の同時性を表わす。(11)では他の事態（P）を分析的に捉え、主語—述語としての表現をとっている。これに対し、(12)では事態を実体的に捉え体言として表現している。これは形式上①型に相当するのであるが、

- (13) 次郎とともに太郎は起きる。

という文と比べてみれば明らかのように、内容の質によって(13)のように共同者を表わすものと、(12)のように事態の発生時を表示するものが区別される。

また、ここでは

- (14) 日が昇ると同時に（すぐに／たちまち）太郎は起きる。  
というように、事態の発生と同時に他の事態との関係として表わしているばかりでなく、

- (15) 日が昇れば必ず太郎は起きる。  
(16) 日が昇ると太郎は起きる。

というように事態存立の必然性、共起性といった論理を表わしていることにもなる。

## ④—b型

- (17) 台風が近づいて来るとともに風が強くなって来た。  
(18) 台風の接近とともに風が強くなって来た。  
当面の事態（風が強くなって来ること）の展開のありようを他の事態（台風が近づいて来ること）との連動として表わすものである。  
(19) 台風が近づいて来るのにつれて……  
(20) 台風が近づいて来るのに歩調を合せて……  
(21) 台風が近づいて来るのと並行して……

というように、当面の事態が他の事態に対して並行的な連続性を有するものであることを示す。そのことはまた、他の事態と当面の事態との間に因果関係をみることにもなる。

以上よりすれば現代語「ともに」の表わす意味としては次のように言うことができよう。

- ・主語（様態文）の対等者
- ・主語（行為文）の共同者
- ・行為の共同性
- ・属性の共通性

- ・ 属性の並立性
  - ・ 事態展開の同時性
  - ・ 事態展開の継続性
- 後の二つが複文関係に於いて成立する意味であるのに対し、他は単文内でのものである。

四—1

次に万葉集の「ともに」の歌について検討する。

(B) 〔原置〕トトモニ

この型のは計七首ある。このうち(ア)を除いて他は総て「天地」ないしは「天地(と)日月」を「と」で承け「ともに」へ続く。

- (ア) 天地とともに終へむ
- (イ) 天地とともに久しく住まはむ
- (ロ) 天地とともにがもと
- (ハ) 天地日月とともに満りゆかむ
- (ニ) 天地日月とともに萬代にむが
- (ホ) 天地日月とともに萬代に記し続がむそ

これらは、形式上は現代語の①型としてあるものであるが、対等のものや共同者を意味するものではない。ここでは「天地」もしくは「天地(と)日月」が続く限り各々の事態、例えば(イ)を例にとれば、大宮人が萬代に存在することを希求しているのである。予想という形で示されているものも含め、意味の形式として

〔天地〕トトモニ 〔当の事態〕希求

を代表としてあげるならば、「天地」はその存続を含蓄された句相当の体言である。「天地」「天地(と)日月」の存続と当の事態の展開が

並行的継続としてあることを希求することを表わすものである。この意味は現代語④—b型の継続性である  
ところで(イ)の場合、形は(B)型であるが、これに継続性の意味はない。歌の意味からすれば「誰と一緒にかづらにして遊びましょか」となる。これは現代語①型の行為の共同者を表わすものである。

(C) 〔トトモニ……〕

助詞を介さないで単独で句の内部の成分となる所謂副詞は次の八首である。

- (イ) 新世に共に在らむ
- (ロ) 立てれども居れども共に戯れ
- (ハ) 共に瀉に出で
- (ニ) 消なば共に
- (ホ) 隠らば共に
- (ヘ) 梅の花共に後れぬ
- (ニ) 共にあらむ
- (イ) 共に挿頭さず

このうち(イ)においては、作者が歌の中に読み込んだ人物と自らが共に生命のあることを願うものである。人物が妻であるところから、「(妻と自分は)一緒に在りたい(生きていたい)」という共同性を意味することになる。

(ロ)では、「消なば」「隠らば」という予想事態において、それぞれ「君」「わが背」と自らとによる実現を目ざすものである。「消えるなら一緒に消えよう」「隠れるなら一緒に隠れよう」という行為の共同性を意味するものとなっている。

(イ)では二つの意味が把握される。「わが子古日と私とが一緒に戯

れ」という意味とすれば共同性を捉えることになる。また「立って  
もすわつてもどちらの場合も等しく戯れ」の意味とすれば共通性と  
いうことになる。

## 四—2

ところで、これまでのところ(C)型の(ウ)については言及するところ  
がなかった。以下この二首について検討する。

まず(ウ)について。

『古典大系』では

潮が干ると一緒に干潟に出て鳴く鶴の音が遠ざかって行く。

磯をめぐっているらしい。(傍線は引用者)

と大意を掲げる。ここでは共同性と捉えているのである。

また『古典文学全集』では

潮が干ると共に潟に出て鳴く鶴の音が遠くなってゆく餌をあ

さっているらしい。(傍線は引用者)

と訳を掲げる。ここでの「共に」が「一緒に」(共同性)の意味な

のか、「しだいに」(継続性)という意味なのか決しかねる。

『萬葉集注釈』では

潮が引くと、連れ立って干潟に出て鳴いてゐる鶴の聲が次第

に遠ざかってゆく。餌をあさつてゐるらしいよ。(傍線は引用

者)

と共同性の意味を引き出している。

ところで、契沖はこれら現代のものとは異なる考えを示す。『萬

葉代匠記』精撰本によれば

塩十者共瀧爾出鳴鶴之音遠放磯回爲等霜

と読み、

共瀧ハ名所ニハアラス。塩ノヒルト共ニ瀧ノ出来ル、其瀧ニ出  
テ鳴鶴ナリ。

とする。契沖は、潮が干ることと干潟ができることとの関係におい  
て「共」の意味を解している。二つの事態の時間的展開を捉えてい  
ることになる。「塩ノヒルト共ニ瀧ノ出来ル」では、同時性が継続  
性を明らかにすることはできないが、干潟というもののありかた  
を把握していることによりすれば継続性において捉えていた  
といえよう。潮が引いていくとともに干潟はしだいにその姿を大き  
く現わして来ることになる。

さて、事態の相関として「共」に対して時間的展開の意味を捉え  
るということであれば、次のような場合も想定できよう。

その一つは、潮が干ることと、鶴が瀧に出ることの関係である。

別の一つは、潮が干ることと鶴の鳴声が遠くなっていくこととの関係  
である。

前者の場合、同時性を想定すると

潮が干ると同時に鶴たちが干潟に出る

となる。また継続性を想定すると

潮が干るにしたがって鶴たちが干潟に出て行く

となる。

後者の場合、継続性を想定すると

潮が干るにしたがって鶴たちの声が遠ざかっていく

となる。ところが同時性を想定すると

潮が干ると同時に鶴たちの声が遠ざかっていく

となり、「遠ざかる」という事態の継続的な展開にこの同時性はな  
じまない。

いま、ここで把握される事態、潮が干ること、鶴たちが瀧に出る

こと、鶴たちの鳴声が遠ざかることは、総て瞬間的に成立するものではなく、潮が干ることを原因とする因果関係の連続の中に在る。このように見て来るならば、契沖の捉え方に従い、さらに全体の展開を一連の事態の連関的継続性へと広げてとりあげることも可能かと思われる。

だが一方で、単独の「ともに」は共同性を表わすものとしてあった。そのことを以てすれば現代の注釈書の考えに従うことが妥当に思われる。だが、それらとのゆが異なる点は、共同性を表わしているものは総て行為の意志を表わすか含意する表現形式であったのに対し、ここでは事態の叙述にとどまっているという点である。

この一首が「潮干れば」からはじまる事態の展開を追うことに主題を置くものであるとするならば、継続性は、潮干ることと干潟の出現ということにとどまらず、さらなる展開を意味することになる。ここに結論を述べるまでの余裕はないが契沖に導かれての疑問を提示しておく。

次に(尚)について。

『古典大系』では、「ともに」を「友に」とする。そして

春雨に促されて早く芽生えた柳でしょうか。それとも梅の花という友達に遅れずに芽をふいたいつもの普通の柳でしょうか。(傍線は引用者)

というように大意を記す。副詞ではないとしているのである。

また『古典文学全集』では

春雨に萌え出た柳が梅の若と一緒に遅れずに姿を見せる景物なのかそれとも四季を通じてのものか。(傍線は引用者)

『萬葉集注釈』では

春雨に促されて萌え出した柳であろうか。それとも梅の花

と共にみられず萌え出した普通の物であらうかな。(傍線は引用者)

というように訳を掲げる。これらは梅の花を柳の共同者として

萌え出た柳ハ梅ノ花トトモニ(春ニ)後レナイ

という現代語の構文関係を設定することになる。先の(尚)が「と」を介して共同者を意味したものであったのに対し、ここでは単独の形で共同者を示すものである。これまでの検討によれば、単独の「ともに」は共同性を意味するものである。先の(尚)では同時性と継続性の意味を想定したが、共同者を示すというものはなかった。

ここに共同性の意味を捉えたとすれば

萌え出た柳ト梅ノ花ハトトモニ(春ニ)後レナイ

という構文関係を設定することになる。そして、この同じ構文で共通性の意味を捉えることにもなる。

また、同時性・継続性という時間的展開の意味をとるとすれば

梅ノ花ガ咲クトトトモニ柳ハ(春ニ)後レズ萌え出シタ

という構文関係を設定することになる。『萬葉集注釈』を基にこれらの意味による訳を試みるならば次のようになる。

△共同性▽

春雨に促されて萌え出した柳であろうか。萌え出た柳と梅の花は一緒に春に後れない普通の物であるのかなあ。

△共通性▽

春雨に促されて萌え出した柳であろうか。萌え出た柳と梅の花は等しく春に後れない普通の物であるのかなあ。

△同時性▽

春雨に促されて萌え出した柳であろうか。梅の花が咲くと同時に柳は春に後れず萌え出した。その柳は普通のものであるのか



なあ。  
 △継続性▽

春雨に促されて萌え出した柳であろうか。梅の花が咲くのには歩調を合わせて柳は春に後れず萌え出した。その柳は普通のものであるのかなあ。

共同者の意味を全く否定することはできないが、この一首が「とにも」の意味から右のような解釈の可能性の中にあることを示唆することができるだろう。

## 五

次に「の」ともにの形式をもつ三首について検討する。

### (A) 体言ノトモニ

まず(一)とそれに最も近いものを示せば、

(一) 天地の共に久しく言ひ継げと此の奇魂敷かしけらしも

(巻五・八一四)

(二) 天地とともに久しく住まはむと思ひてありし家の庭はも

(巻四・五七八)

ということになる。これは天地の存続と当の事態の存続を希求するものと捉えることができる。ここでの「ともに」は、当の事態に關して天地の存続と並行的な継続性を意味する。先に引用したのもも全て「とともに」と訳し、継続性を捉えていた。では何故に「の」であるのかとの問いに留意されていたのが、意味としては「とに通ふ」であり、形態としては、形式名詞「とも」の「の」を介しての複合関係であった。これに關しては先に見たとおりである。

契沖は『萬葉代匠記』精撰本で

一二ノ句ノツ、キハ、天△ト▽地△ト▽ノ共ニ久シキ如クト云ト、天地ト共ニト云トノ意替ルヘケレド、往テハ同シ事ナリ。

と記す。これは「天と地とが兩者ともに」に「一緒に永遠であるように」として、「天地の」を主語、「ともに久しく」を述語とする主述関係において「ともに」の意味を「天」と「地」との共同性として捉えようとするものである。ここでは

### 天ト地ハトモニ久シイ

という構文関係を設定することになる。それはまた共通性を捉えることにもなる。「天と地とが等しく永遠であるように」という意味である。

また時間的展開の意味をみるとすれば、

### 天地ノ存続スルトトモニ永遠ニ語り継ゲヨ

という構文関係を設定することになる。ここに同時性の意味をとろうとすれば「永遠に語り継げよ」とする一首の意味と矛盾する。従って、継続性の意味をとることになる。このように考えるならば、ここでも「天地の」は主語であり、存続するということを表わす述語が省略されたものということになる。

右の契沖においては、「天」と「地」とに共同性を見たのであるが、共同性の「ともに」はそれだけに限らない。一首は、一つの事態を語り継げよということで、神功皇后が靈石を置かれたらしい、という意である。従って、語り継ぐ主体の共同性を意味する場合も考えられる。直前の長歌(八一番)によって、それを世の人々の共同性であるとするならば、

### 世の人々ハトモニ久シク語り継ゲヨ

という構文関係を設定し、「世の人々は一緒に永遠に語り継げよ」

という意味を捉えることもできる。とすれば、ここでの「天地の」は、「天地が永遠であるように」という比喩の意味を形成する。これは「天地のごと」の形式名詞「ごと」の省略されたものと考えられる。

右と同じ構文関係から共通性の意味を捉えるならば、一首は「天地が永遠であるように、世の人々は等しく末永く語り継げよ」ということでこの靈石を置かれたらしい」となる。

以上の検討よりすれば、いずれにしても「天地の」はそれ自体で句として機能するものであり、「ともに」との直接的な関係を持たないものであると分析することができる。「天地の」の「の」は、「と」との置き換えを可能としない。

次は

(一) ほととぎす来鳴きとよもす卯の花の共にや来しと問はまし  
ものを (巻八・一四七二)

について検討する。『古典大系』と『萬葉集注釈』は「卯の花と一緒に……」と訳し、『古典文学全集』は「卯の花と共に……」と訳していた。これらはいずれも

ホトトギスハ卯の花トトモニ来ル

という構文関係で、共同者として卯の花を示していることになる。ところで共同者として卯の花を設定するのであれば、卯の花というものが元々ホトトギスと同様にやって来るといふ移動の行為ができてものでなければならぬことになる。現実には花が移動するなどということは不可能であり、はじめからこのような関係設定であることは不自然となる。また、

ホトトギスト卯の花ハトモニ来ル

という構文関係で、共同性「ホトトギスと卯の花は一緒に来る」、共通性「ホトトギスと卯の花は等しく来る」という意味をみようとすることも同様に現実的な把握ではないことになる。

契沖は、左注により、旅人の妻の挽歌ととらえ、

霍公鳥ハ卯ノ花ニシタシキ鳥ナレハ、ナキ人ノ魂ト共ニヤ来シト云ハム為ニ、来鳴トヨマスウノ花ノトハ云ヘリ。

と『萬葉代匠記』に述べる。「卯の花の」を「ナキ人ノ魂」としてみるのである。魂であればホトトギスと共に移動可能ということであろうか。

ところで、ここでホトトギスが来ることと対応する事態は、卯の花が咲くことである。両者をつなぐ構文関係は

卯ノ花ガ咲クトトモニホトトギスが来ル

である。これは卯の花が咲くことと、ホトトギスが来ることとの事態発生の同時性を意味する。先に検討したように、同時性はそこに事態存立の必然性を含意する。それは、「卯の花が咲けば必ずホトトギスが来る。」である。いま、この論理をホトトギスの側に視点を置いて再構成すると、「卯の花が咲くからホトトギスが来る。」を得る。構文関係にこの論理が存立するものとすれば、一首は、

ほととぎすが来て鳴きたてている。もしお前が話しが出来るものなら、卯の花が咲いたからやって来たのか、と尋ねようものを

と解することができよう。これは「卯の花の」を「ともに」に直接関係づけることを意味しない。「卯の花の」は「卯の花が咲く」を含意する句相当であり、「卯の花の」の「の」は主語を示すものと考えられるのである。

最後に

(三) 卯の花の<sup>||</sup>ともにし鳴けばほととぎすいやめづらしも名告り  
鳴くなへ

について検討する。『古典大系』『萬葉集注釈』は「卯の花が咲くのと「緒に鳴くので」、『古典文学全集』は「卯の花が咲くと同時に鳴くので」と訳していた。これらは

卯ノ花ガ咲クトトモニホトトギスガ鳴ク

という構文関係で、同時性として捉えている。同時性はそこに事態存立の必然性を含意していることは先の例でも明らかにしたのであるが、『古典文学全集』の頭注においても

名告り鳴くなへ——このナへは、( )の上での原義的用法。

ほととぎすは自分の名を口にするだけで妙であるが、卯の花が咲くと必ず鳴くのもおもしろいという気持。

と記している。卯の花が咲くことと、ホトトギスが鳴くことを必然性として捉えているのである。「卯の花の<sup>||</sup>」は「卯の花が咲く」を含意する句相当であり、「卯の花の<sup>||</sup>」の「の<sup>||</sup>」が主語を示すものであり、「ともに<sup>||</sup>」と直接関係をもつものではない。これは前のものと同じである。

以上の検討を通して、「とに通ふの<sup>||</sup>」として示される「体置の<sup>||</sup>とも」の構造は、「とも」に対する複合語を成すものではなく、「体置の<sup>||</sup>」は句を構成するものであることが明らかとなった。

(一)では、「天地の<sup>||</sup>」自体が「天地が永遠であるように」という比喩的修飾成分として句的存在である。

(二)は、共同者の提示の如くあるものの、共同の行為ということを検討することにより、それが不自然なものであることは直ちに明らかとなった。

かとなった。

(三)では、各注釈書も明らかに主語として「卯の花の<sup>||</sup>」をとりあげている。ただ構文関係が同時性であることを以て必然性の把握へと至るといふ説明は行なわれていない。

結局、宣長のいう「とに通ふの<sup>||</sup>」は、「体置の<sup>||</sup>」の形式で句を構成するものであり、「とも」との直接的な関係は持たないことになる。

ちなみに契沖は(三)について『代匠記』精撰本で

字能花能 開爾之奈氣婆

と読み、

卯花ノ咲初ルト霍公鳥ノ初音トアヒニアヒテメツラシキ意ナリと記す。「卯の花の<sup>||</sup>」を主語とし、一首の「ともに<sup>||</sup>」を同時性の意味で解釈しているものと思われる。

万葉集以後の「の<sup>||</sup>とも<sup>||</sup>」に関しては富士谷成章の説の検討も含め今後の課題としたい。

### 注

- (1) 同様の指摘が富士谷成章『あゆみ抄』にも巻三「の家」に「何のとも<sup>||</sup>」として記されている(参考文献⑤230ページ)。
- (2) 松下大三郎(参考文献⑨202~304ページ)尚、松下は、これをはやくは「後置詞」としてとりあげた(参考文献⑩30~34ページ)。
- (3) この場合、鶴が瀉に出ることと、鶴が鳴くことを分離してとりあげることでもできるが、いまは一体として瀉に出て鳴くことを瀉に出ることと代表する。
- (4) 『日本文法大辞典』格助詞「の<sup>||</sup>」②③「下の形式名詞『こと』を

省略したもの。これはまた『萬葉集注釈』が「の如く」の意となる  
として一旦は示した考えに従うことでもある。

### 参考文献

- ① 『日本古典文学大系 萬葉集全四巻』（岩波書店、一九五七年～一九六二年）
- ② 『日本古典文学全集 萬葉集全四巻』（小学館、一九七一年～一九七五年）
- ③ 澤瀉久孝『萬葉集注釈全二十巻』（中央公論社、一九五七年～一九六八年）
- ④ 契沖『萬葉代匠記』（『契沖全集』一～七巻 岩波書店 一九七三年～一九七五年）
- ⑤ 富士谷成章『あゆひ抄』（中田祝夫・竹岡正夫『あゆひ抄新注』、風間書房、一九六四年）
- ⑥ 本居宣長『詞の玉緒』（『本居宣長全集』第五巻 筑摩書房、一九七〇年）
- ⑦ 佐久間鼎『現代日本語法の研究』（厚生閣、一九四〇年）
- ⑧ 豊島正之「初期キリシタン文献の文語文に見える『ともに』について」（『国語と国文学』昭和五十七年二月号）
- ⑨ 松下大三郎『改撰標準日本文法』（紀元社、一九二八年）
- ⑩ 同『日本俗語文典』（徳田政信編『訂日本俗語文典』勉誠社、一九八〇年）
- ⑪ 森田良行『基礎日本語2』（角川書店、一九八〇年）
- ⑫ 山田孝雄『日本文法論』（宝文館、一九〇八年）
- ⑬ 同『奈良朝文法史』（宝文館、一九五四年）
- ⑭ 渡辺仁作『『の共に』と『の同じ体言』』（『解釈』昭和五十九年二月号）